

■学校経営のポイント

探究はジェットコースター

喜名 朝博

一般的なジェットコースターは、まず最高点までチェーンで引き上げられ、位置エネルギーが蓄えられる。その位置エネルギーを運動エネルギーに変換させながら複雑なループや高低差を自走していく。

このジェットコースターの仕組みは、子どもたちの探究にあてはめることができる。

初発の思考や行動を起こす力は位置エネルギー

次期学習指導要領のキーワードとなる「初発の思考や行動を起こす力」。それは、子どもたちが未知の課題に対して「おや?」「どうしてだろう?」と自ら問いを立て、主体的な探究へと踏み出すための力である。

ジェットコースター同様、最初の位置エネルギーが高ければ高いほど、探究は自分事となり、自走距離も長くなっていく。途中で待ち受ける困難という高低差も、自らの勢いで乗り越えていくことができるのだ。「初発の思考や行動を起こす力」が重要視される理由はここにある。

位置エネルギーを最大化する

位置エネルギーとしての「初発の思考や行動を起こす力」は、単元や授業の導入で決定づけられる。位置エネルギーを最大化するために、教師は導入を工夫する。テーマに関わる事象を切り取って提示したり、実際にその場に連れて行ったりして、事象との心理的・物理的距離を縮めていく。

一方、子どもたちは、既習の知識や経験では説明できない事象に出会うと、そのギャップを埋めようとモヤモヤする。そのモヤモヤこそが、「初発の思考や行動を起こす力」の出发点である。このときに重要なのは、自分の力で解決できそうだと見通しが立てられることである。さらに、自分一人ではなく仲間と協働すればできそうだと確信できることである。

ハードルは高すぎても、低すぎても、「初発の思考や行動を起こす力」は生まれない。ヴィゴツキーの発達の最近接領域(ZPD)にハードルを設定することが、教師の導入の工夫となる。

摩擦やブレーキへの対応

摩擦と空気抵抗によってジェットコースターの運動エネルギーは常に減衰している。探究の過程にも摩擦やブレーキが存在する。それを見極め、最小化することも教師の授業デザイン力となるが、教師自身が探究のブレーキとなっている場合があることも自覚しなければならない。

子どもたちが思考を巡らせ始めた瞬間に教師が先回りして道筋をつけてしまったり、思考を狭めるような条件を設定したりすることで、運動エネルギーは急激に減衰する。また、探究過程における摩擦は、学習活動の単調さや見通しの不明確さである。

その解消のために再び位置エネルギーをチャージする場が必要となる。それが、振り返りであり、情報交換による思考の外化である。協働的な学びが運動エネルギーを高めていく。

導入の重要性を再認識する

カタパルトによって瞬時に運動エネルギーを与えるジェットコースターがある。単元のゴールや本時のめあてを意識するあまり、子どもたちの主体性を無視し、最初からトップスピードに乗せるような授業をしていないだろうか。

導入に十分な時間をかけ、子どもたちの「初発の思考や行動を起こす力」の高まりを大切にしたい。子どもたちが自らのエネルギーで自走する授業が求められている。

(きな・ともひろ=国士舘大学客員教授/元全国連合小学校長会長)

マップ&シートで速攻理解!(6/24発売!)

最新の教育改革 2026-2027

金子一彦【編集】 B5判/定価 2,640円

本の詳細およびご予約は、右QRコードより小社ホームページをご利用ください。

